就労前訓練中であるアスペルガー障害の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸本, 直子, 岩﨑, 正子, 根來, 秀樹, 澤田, 将幸, 太田, 豊作, 定松, 美幸, 飯田, 順三, 岸本, 年史 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4775

就労前訓練中であるアスペルガー障害の事例

岸本　直子[※1]／岩﨑　正子[※2]／根來　秀樹[※3]／澤田　将幸[※4]／
太田　豊作[※4]／定松　美幸[※4]／飯田　順三[※5]／岸本　年史[※4]
[※1] 臨床心理学専攻修了生・奈良県立医科大学精神医学教室　[※2] 臨床心理学専攻教授・カウンセリングセンター相談員
[※3] 奈良教育大学　[※4] 奈良県立医科大学精神医学教室　[※5] 奈良県立医科大学医学部看護学科

要約

青年期や成人期の発達障害の問題に対する注目が高まっているが，広汎性発達障害の転帰や社会適応に関しては，未だ十分な資料が得られていない。本稿では，養護学校を卒業した後，就労前訓練を行い，社会適応が良好なアスペルガー障害を持つ青年の事例を報告する。就労支援施設での青年の様子に加え，本青年の母親，養護学校当時の担任教師，主治医，施設職員に対するインタビューを通して，アスペルガー障害の特性を生かした就労支援の在り方について考察を行った。対人関係の不得手さ，聴覚過敏やスケジュールに対するこだわり，集中困難といった自閉症圏独自の困難さが本格的な就労にあたり問題となるが，対人技能を必要とせず周囲の理解を得ることができ，障害特性に応じた職種を選定することができれば，安定した社会適応に繋がる可能性が示唆された。

キー・ワード：アスペルガー障害，就労前訓練，就労支援

Ⅰ　はじめに

近年，医療現場のみならず教育現場や一般社会においても，アスペルガー障害を含む広汎性発達障害に対する関心が高まっている。最近では青年期や成人期の発達障害の問題も注目され始めているが，広汎性発達障害の転帰や社会適応に関しては，未だに十分な資料が得られているとは言い難い。アスペルガー障害を持つ人々は一見流暢に話すが，語義・語用障害があるためにさまざまな生活の困難さを持っており，そのことが周りの人々に理解され難く，重度の知的障害のある人々とは異なる次元での深刻な就労問題を抱えている(山崎ら，2009)。

就労する自閉症児・者の数は 1992 年に不況が始まるまでは 10 年余りの間，年々増加してきた。1983 年の若林ら(1986)による愛知県における 20 歳以上の自閉症の追跡調査では 101 名の対象中，就労者は 13 名のみであり，就労率は 12.9%であった。1990 年の小林ら(1990)の九州山口地方における調査では 201 名中 46 名が就労しており，就労率は 23%であった。しかしながら，就労しても挫折する症例が少なくないことも同時に示されるようになった。小林らの報告では 8 名が就労後に離職した。1988 年の全国調査(東海，1990)では，転職者 20%，離職者 6%，計 26%という高い転職率や離職率が示され，1990 年の調査でも転職率は 20%であった。以上の調査結果より，広汎性発達障害を持つ者の就労の問題は決して楽観できないことが指摘される。

本稿では，養護学校を卒業した後に就労前訓練を行い，比較的社会適応状態が良好なアスペルガー障害を持つ青年の事例を紹介し，就労支援施設での様子に加え，本青年の母親，養護学校当時の担任教師，主治医，施設職員へのインタビューを通して，アスペルガー障害の特性を生かした就労支援の在り方について考察を行った。

Ⅱ　事例

事例：男性A，20歳。

家族歴：父・母・兄・妹2人。父方の祖父と同居。

現病歴：同胞4名中第2子。出生に特記すべきことなし。発語は1歳程度であったが，おうむ返しがあった。初歩は1歳7ヵ月であった。3歳時，集団生活に適応できないため，児童相談所を訪れたが異常は指摘されなかった。4歳時よりは通級を利用していた。小学校に入学すると，パニックを起こし同級生とトラブルになることが多かった。中学校進学後は，同級生が茶髪にしているとその同級生を注意し，喧嘩になることもしばしば認められた。順番が違うと嫌がる，何曜日には何をすると決めているなどといったこだわりがあった。母親が自閉症を疑い診断を希望して，B大学精神科児童思春期外来受診となった。

1. Aの就労支援施設Cでの様子

就労支援施設CでのAの主な作業内容は卵を磨くこととにわとりの世話であった。卵を磨く作業は自由に自分のペースで行うことができノルマはない。Aは1人で，卵を磨く前に殻を叩いて殻の固さを確認し殻のもろいものは除き卵磨きが終わると磨き終わった卵を紙パックに詰めていく作業を行なっていた。卵がなくなった時や作業に集中できなくなってきた時は，外のにわとり小屋や空き地に行き，気分転換をしているようであった。Aは卵の売れ行きや販売先を増やすことができないかなどといったことを気にしており，作業に対して積極的な姿勢がみられた。

作業は1人で行っているので，他の職員の方々との関わりはあまりない。また施設Cは小規模で職員4〜5名が勤務しており，重度精神遅滞の子どもたちの居宅支援を行っている。Aにとっては重度精神遅滞の子どもたちの言葉にならないような無意味な発声が耐え難く，子どもたちを見かけるだけで「うるさい」と怒鳴る場面が何度も見られ，子どもたちを叩いたりすることもあった。そして，子どもたちと同じ建物内にいることもAにとっては苦痛な様子で，子どもたちが施設Cから出かけるまで外で待機していることもあった。

Aの発語は流暢で文法的な誤りもほとんどなく多弁である。言葉遣いや口調が大人びており，声の大きさの調整が下手で必要以上に大きな声で話すことがあった。会話の内容は同じことの繰り返しが多く，メディアや雑誌等から得たであろう知識や情報を受け売りしているような節が窺えた。また，A自身の独語に対して父親から「それでは社会でやっていけない。やめなさい」という注意を受けたことについて，Aは「注意されても直らないので苦痛である」と訴え，「考えていることをそのまま話してしまう」と述べていた。

2. 母親に対するインタビュー

母親によるとAは発語は1歳頃であったが，その後，言葉はおうむ返しが多く代名詞の反転現象などがみられた。歩行は1歳7ヵ月，他の発達もやや遅れていたとのことであった。幼少期はおうむ返しが特徴的で多動であり，集団行動や他者とのやりとりの困難さがあったようである。また，母親はAについてスケジュールに対するこだわりがみられ，例えば，朝は学校に行く時間が決まっており，その時間を逃すと家を出られないということがあったと話している。

Aは地元の小学校・中学校の障害児学級に通い図工や体育のみ通常学級で授業を受けており，中学校卒業後は集団行動が苦手であることが理由で本人の希望した学校への進学は許されず，養護学校に進学することとなった。養護学校卒業後の進路については，進路体験学習を通して検討した。Aが自らは3〜4ヶ所見学に行き，その中で現在通所している就労支援施設Cへの通所を決めた。施設Cは周囲が田畑に囲まれた静かな場所にあり，創設されたばかりの施設であったので施設C自体も柔軟な対応を行うことができた。母親はAの施設Cでの作業内容について「にわとりの世話をして卵を磨くという作業も，本人の仕事として明白で分かりやすかった」と述べている。また，施設への通所が可能となったのは「学校の進路指導の

おかげであり本人が気に入っている間と施設の方が運営していける間はこのまま通所させたい」と希望している。しかし，母親は今後も通所が続けられるかどうか，法律の変更により自己負担が増えることを危惧していた。

3. 主治医に対するインタビュー

主治医によると，A の診断はアスペルガー障害であるが，不注意，多動，衝動性など注意欠如・多動性障害に近い症状も持っていると指摘している。また，主治医はAについて「視線が合わない，相手の気持ちになれない，友達関係ができないといった点でもアスペルガー障害の特徴がはっきりしている」と述べている。治療を円滑に行うことができた一因として，A が通学している養護学校に校医として行っていたこともあり，養護学校当時の担任教師との連携が取りやすかった点を挙げている。就労にあたっては人と関わっていく仕事，対人的な仕事は難しいとアドバイスしたとのことであった。

4. 養護学校当時の担任教師に対するインタビュー

担任教師は入学当初のAの様子について「中学校の障害児学級に通級していた中で養護学校に来たのが自分だけだったので，非常にショックを受けていた。学校に対する嫌悪感が強く，すごく苛々していて，いつも怒っており，落ち着かない状況であった。元々ざわざわしたり大集団が嫌いなので，なかなか教室に入らなかったり，入ってもすぐに出て行くという状態であった。口を開けば文句しか言わないので，他の教師ともすぐ喧嘩になってしまった」と話している。このことについて，担任教師は A の気持ちを推し量り「A にとって，養護学校に入学したこと自体が傷つき経験だし，えらそうにしているけれど，その反面，自分ではできないことをいっぱい抱えていて，反抗的な態度は自信のなさの裏返しなのだと理解していた」と話した。担任教師は「そのことを他の教師にも伝えるようにしたことでAと関わりを持つ教師が増え，入学当初のように誰とでもすぐに喧嘩になるという状況は改善された」と述べていた。

卒業後に向けての進路選択について，担任教師はAの特性を考え，小集団で認識面の力の高い人がいるところが望ましいと考え，母親と相談して，小集団でかつAの嫌いな無意味な発声をする重度精神遅滞を持つ人がいないところを進路体験学習で選ぶようにしたと話している。また，担任教師はAの現状について，Aは施設に対して思った以上に愛着を持っており，小遣い程度であるが報酬をもらっていることで，仕事という自覚を持つことができ安定した通所ができていると評価している。担任教師は作業内容について「卵を磨くという作業も磨くときれいになるので，目で見て結果がすぐ分かるという点がAに合っている」と話していた。

5. 施設職員に対するインタビュー

施設 C でのAの様子について，施設職員は「作業中は落ち着いているので，作業内容は本人に合っていると思う。しかし，居宅支援を利用している重度の精神遅滞の子どもに対して，うるさいと怒鳴ったり，手を出すことが困っている。彼は手が先に出てしまうので，子どもが多い時に同じ場所に居させないなどの工夫が必要。狭くても1人になれる場所を作りたいと考えているが，1 人になれて，かつ孤独にならないように配慮したい」と述べていた。また，施設職員は青年の就労前訓練がうまくいっている要因として卵磨きを仕事として本人が捉えている点を挙げ「A が仕事としてイメージを持つことができている点がうまくいっている要因としていちばん大きいと思う」と語った。

Ⅳ　考察

今回我々は，就労前訓練中のアスペルガー障害を持つ青年Aの事例を経験した。まず，1. 比較的適応状態が良好である要因と，2. その一方で本格的な就労を困難にしている要因について考察を行う。

1. Aの施設適応の評価とその要因

広汎性発達障害を持つ人々の就労について，梅永(2009)は対人関係が必要な仕事や言語によるコミュニケーションが必要となる仕事，想像力を働かさなければならない仕事などは勧められないと述べている。就労支援の際に最も大切なことは，仕事に彼らを合わせるのではなく，彼らに合った仕事を見つける，あるいは作り出すことであり，さらには企業に対して彼らの特性や興味，長所をきちんと説明し，理解してもらうことが必要であると指摘している。また文ら(2005)は，アスペルガー障害の予後は，個人により多様であり，社会への適応性も特に問題のない者から，不適応を起こしてひきこもりや暴力行為を起こす者など現状は様々であると述べ，アスペルガー障害の予後には，本人の持つ症状の特性に加えて家族や学校など周囲の環境が本人に対して起こす反応が大きく影響を与えている可能性を示唆している。

杉山(2001)は，高機能自閉症である青年の就労が困難な要因を二つ挙げ，一つは仕事自体の困難さで，特に二系列の仕事を同時にこなすといったことが難しいと述べている。非常に高い知能を持つ者でも，例えば電話を聞きながらメモを取るといった並列作業ができないこと，また，一つの仕事の片付き具合を見て別の仕事を行うといった先読みを要する作業ができないことを指摘している。二つ目の要因は，対人関係を挙げ，職場で要求される多彩な対人関係に適応することが難しいと述べている。

Aの場合，作業内容は卵を磨くことやにわとりの世話であり，対人関係を必要としない。また，施設自体ができて間もないことから，Aと同年代で同じ作業を行う利用者がおらず，利用者間同士の対人関係も必要としていない。にわとりに餌をやる，卵を磨く，磨き終わった卵をパックに詰めるといったように，作業はそれぞれ独立しており，並列作業ではなく直列的な作業である。困難な並列作業は，仕事上の挫折の要因となるが，Aの作業は直列的であるので，養護学校を卒業した現在も施設への通所が続けられているのではないかと考えられる。また，卵を磨くという作業は，泥に汚れた卵を磨くときれいになるのが分かり，磨き終わった卵はパックに詰め，出来上がったものが目に見えて分かる。作業状況が視覚的に分かりやすいことも，就労前訓練が円滑に継続できている要因の一つであると考えられる。

さらに，施設職員のアスペルガー障害に対する理解が得られている点もAの施設への適応状態を良好にしていると考えられる。Aには聴覚過敏の症状もあり，居宅支援を利用している重度の精神遅滞の子どもたちとの関係は良好ではないが，施設内で同じ場所に居ないようにする，また，作業を1人で行えるスペースを設けるなど施設職員がAの障害特性に応じて個別の対応を行っている。施設を選ぶにあたっては，母親，主治医，養護学校当時の担任教師の連携がスムーズに行われており，Aの障害特性を考慮した進路体験学習を基に現在の施設へ通所することを決めている。専門家による心理教育的介入が，職業を選定し就労前訓練を良好に行っていることに大きな役割を果たしていると思われる。また，Aは卵磨きの作業を仕事として認識しており，作業に対して積極的な姿勢で臨んでいる。施設通所を継続できているのも仕事としての認識から生まれる責任感に拠るところもあると考えられる。施設では給料という形で少額ではあるが，Aに現金を支給しており給料として現金を受け取っていることが仕事としての意識を高めているのではないだろうか。

以上，Aの施設での適応状態が良好な要因として，作業内容が対人関係を必要としないこと，障害特性に応じた進路選択がなされていること，施設職員のAに対する理解があること，A自身が作業を仕事として認識していることといった主に4つの要因が挙げられるが，これらの4点に加えて，Aにおいては，母親や養護学校の担任教師による熱心な関わりがあることも現在の適応状態を比較的良好にしていると考えられる。特に母親に関しては幼少期から他の児童と我が子の違いを感じて

おり，専門機関に働きかけるなど障害を知ろうとする積極さが窺える。また，養護学校卒業後の進路についても，Aの障害特性に応じた無理のない範囲でできる限り自分らしく過ごせるところを探し，選択しているように感じられた。そういった周囲の働きかけをAも拒絶することなく受け入れており，母子関係や担任教師との関係は良好であるといえる。

AはAと関わる周囲の人や環境に非常に恵まれたものと思われるが，A自身も気を許した周囲の人々の意見は比較的素直に受け入れられている。Aの表面に現れている部分だけでなく，周囲が彼の内面に目を向け，彼と関わろうとする気持ちを持つことで，Aにもその周囲の気持ちを感じ取ることができていると思われる。

2. 本格的な就労に向けての課題と問題点

就労支援を行っている施設での適応状態は良好なAであるが，本格的な就労を果たすには至っていない。本格的な就労を困難にしている点として，第一に挙げられるのは聴覚過敏の症状である。Aにとってはざわざわした音や話し声などの騒々しい状況は耐え難いものである。そのため，大集団内での作業は困難となる。また，騒音に耐えられず，バスに乗車することができないので，利用できる交通機関が限られることも就労にあたっては問題となる。バスを利用する所への通勤は困難であり，電車利用あるいは徒歩のみの所に限られる。また，Aにはスケジュールに対するこだわりがみられ，予定外の変更に対する柔軟な対応は難しい。現在は施設への通所時間が決まっており，変更を要することはないので問題となることはないが，本格的な就労にあたっては，複数の仕事の優先順位を決めることや，瞬時に判断が必要となる場面も考えられ，そういった時にこだわりが問題となり，対応が困難となることが予想される。上述の点に加え，集団行動や他者とのやりとりの困難さが窺える。どういった状況であっても，自分の考え方に合わない他者に対して注意をしてしまうといった行為が見られることから，職場での対人関係が難しいことが推測される。Aは言語能力自体には問題がないが，他者の気持ちを考えることが困難であり，対人関係を築きにくい。会話スキルの問題があり，他者の新しい話題に合わせていくことが難しく，自身の興味に偏った同じ話題やパターンの決まったやりとりが繰り返される傾向が窺える。対人的な職業は困難であるだけでなく，職場で同僚の人たちと話す時に他の人の話題に合わせにくく，職場で求められる対人関係を築きにくい可能性が示唆される。

広汎性発達障害を持つ者の対人関係については，神尾(2003)は，広汎性発達障害を持つ者では成長に伴い言語やその他の能力が伸びるにつれて，視線，表情，身ぶりを用いる頻度が増えるが，それらを対人的文脈や会話と統合して用いるのは依然困難であると述べている。Aについても，職場で必要となる多彩な対人関係を築くことは非常に難しいことが予想される。また，対人的な仕事も難しいと考えられ職種も限られる。

Aの本格的な就労を困難にしている要因は自閉症圏の人々が抱える就労を困難にしている要因にあてはまる。山崎ら(2009)は，自閉症スペクトラムの人々の就労支援を行う場合に，それらの人々が抱える生活の困難さについて理解しておく必要性を指摘している。障害特性として，臨機応変な対応の困難さ，コミュニケーションに関わる困難性，対人状況および集団への適応困難がある，手先の不器用さ，感覚過敏の五つを挙げている。Aにおいても，対人関係の問題のみならず，判断を含む仕事や並列作業が不得手であるなどといったものが，特に自閉症圏独自の就労を困難にしている要因と一致すると考えられる。

上述の両方の要因を考え合わせ，指摘した問題に対して解決を計ることが，Aに限らずアスペルガー障害の就労を可能にする要因の一つとなるものと思われる。したがって，さらに就労支援の要点を 1)発達早期から関わる家族及び関係者，2)アスペルガー障害を持つ本人，3)受け入れる側(職場や社会)，それぞれの視点で考察を加える。

1)　発達早期から関わる家族及び関係者に望まれる取り組み

出来るだけ早期にきちんとした診断と心理教育的介入を受けることが重要である。適切な診断を受けることで親や本人，教師をはじめとする周囲の者が障害を受容しやすくなり，それによって適切な療育や支援を受けることに繋がることが推測される。また，これらの療育や支援を継続することも必要である。継続的な受診の利点について，中林(2004)はセラピストの視点を通すことで，子どもの生活年齢や環境の変化に合わせ，その都度子どもの状態や変化を客観的に確認できること，子どもやそれに属する教育機関に向けての対応の適切さが保持されること，加えて，一歩先の情報が提供されることを挙げている。A の場合は，診断を受けたのは 17 歳時であったが，母親が A の幼少期より本などで勉強しており，自閉症との認識を持っていたことから，母親を含む周囲の者の A に対する理解が進み，支援体制も良かったといえる。

また，進路や職業の選定にあたっては，障害特性に応じた選択が必要である。Morgan (1996)は，アスペルガー障害と自閉症の雇用訓練プログラムモデルとして，その個人の事情に通じている者による雇用の機会の選択，働く体験，連続的なサポートを追究することの援助の重要性を指摘している。A においても，アスペルガー障害の診断を受けてからはアスペルガー障害の障害特性に応じた支援や進路選択がなされている。これらのことは母親を含む周囲の者の理解や支援及び障害特性に応じた進路選択が A の就労前訓練を良好にしていることを示しており，Morgan (1996)の指摘とも整合するものである。

2)　アスペルガー障害を持つ本人に望まれる取り組み

就労に際しては自身の特性に合った職種を選ぶ必要がある。円滑な対人関係を築くことに困難さを持つため，言語の獲得があるアスペルガー障害であっても対人的な仕事は不向きである。しかし，問題となるこだわりに基づく行動については，職業に生かすことができればマイナスとなることはない。中村ら(2005)は，成人の高機能広汎性発達障害を持つ者では，社会適応するためには周囲の理解とサポートが必要なこともさることながら，彼らの能力を生かし専門性を身につけたり資格を持ったりすることが有用であると述べている。例えば，A のように何かものを磨くことや，機械の組み立て，また才能に恵まれればコンピューター関連の作業などが仕事内容として考えられる。また，職業を選ぶ際には，障害者職業センターの利用や専門的な機関を介して適した職種を選ぶことで，仕事の継続に繋がるだろう。Mawhood et al. (1999)は援助的雇用プロジェクトを高機能広汎性発達障害の成人に行った。その結果，援助を受けた者の方が仕事のレベルも高く，より多くの時間うまく活動できており，雇用者も自閉症スペクトラムの者を雇うことの肯定的体験によってその後の雇用を快く引き受けたことを報告している。

アスペルガー障害を持つ者が本格的な就労を考える時には，対人関係の問題は避けることができない。ソーシャル・スキル・トレーニングや就労前訓練を通して，少しでも他者と交流することを学ぶことも大事であると考えられる。

3)　受け入れる側(職場や社会)に望まれる取り組み

アスペルガー障害を持つ者が就労を果たす際には，周囲の障害特性に対する理解が求められる。ソーシャル・スキル・トレーニングや就労前訓練を通して対人関係の場を経験したとしても，アスペルガー障害であるために他者の気持ちを理解し心を通じ合わせるというのは，実際には非常に困難である。アスペルガー障害を持つ者たちは，症状の一つとして例えば，相手の嫌がることをそうとは分からずにしてしまったり，相手の欠点をそのまま指摘してしまったりすることも多い。アスペルガー障害故であるといった理解がなされるよう，障害特性に対する周囲の理解は不可欠である。受け入れる側である職場においてはなおのこと，

一般社会においてもアスペルガー障害に対する理解が促進されることが望ましい。

以上のことを含めて最後に論点をまとめさせて頂く。アスペルガー障害をはじめとする高機能広汎性発達障害の社会適応に関する研究や取り組みは未だ十分ではない。幼少期に発達障害の存在を見逃されることも多く，早期診断及び介入によって就労へと繋がっていくべき支援が得られず，一貫した発達支援が受けにくいというのが現状である。しかし，高機能広汎性発達障害の社会適応や就労の問題は今後の重要な研究されるべき課題の一つである。就労という形で社会参加をすることは，アスペルガー障害を持つ者にとって対人関係の練習の場となるとともに，仕事をしているという認識が自尊感情を支えることとなるだろう。アスペルガー障害を持つ者の就労支援について心理臨床の面からできるアプローチの一つとして，母親をはじめ周囲の者のアスペルガー障害に対する理解を促進することに加えて，アスペルガー障害を持つ本人に対しても職業の選定ができるよう自身の障害特性に対する理解を促すことが大切である。また，彼らが社会の中で自分らしく生きられるように，表面に現れている部分だけでなく，周囲の人が彼らの内面に目を向けることが重要であろう。本稿は一事例に基づく検討であったが，今後は事例数を増やすことで上述のことがより明確に示されると考えられる。

＜付記＞　なお，本論文は大阪樟蔭女子大学研究倫理委員会の規準を満たしており，当事者及び関係者の了承を得ている。

文献

文鐘玉・久場川哲二・久江洋企他（2005）：アスペルガー障害の２症例―早期診断，療育の導入の必要性―　臨床精神医学，34(9)，1237-1244.

神尾陽子（2003）:高機能広汎性発達障害の診断と治療の実際　精神科治療学，18(2)，227-233.

小林隆児・村田豊久（1990）：201 例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題　発達の医学と心理学，1，523-537.

Mawhood L, Howlin P（1999）: The outcome of a supported employment scheme for high-functioning adults with autism or Asperger syndrome. *Autism*, 3，229－254.

Morgan H（1996）: *Adults with autism: A guide to theory and practice.* UK: Cambridge University Press.

中林睦美（2004）：アスペルガー障害への早期介入が思春期以降に与える影響　精神科治療学，19(10)，1211-1216.

中村晃士・小野和哉・山内美和子・高橋道子・中山和彦（2005）:職場不適応にて明らかとなった成人高機能広汎性発達障害例―アスペルガー障害の社会適応をめぐって―　臨床精神医学，34(9)，1279-1286.

杉山登志郎・辻井正次（2001）:高機能広汎性発達障害　児童青年精神医学とその近接領域，42(2)，114－123

東海敬(1990) :全国自閉症児者就労実態調査　心を開く，18，13-21.

梅永雄二（2009）：自閉症スペクトラムの人々の具体的就労支援について　精神療法，35(3)，344-349.

若林真一郎・杉山登志郎（1986）：成人になった自閉症　精神科治療学，1，195-204.

山崎晃資・石井哲夫・神保育子（2009）:自閉症スペクトラムの人々の就労問題　精神療法，35(3)，306-311.